

令和 2 年 6 月 24 日現在

機関番号：17601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04801

研究課題名(和文) 英語教師の学習モデルを構築するアクション・リサーチ

研究課題名(英文) Action Research on Constructing Learning Model of English Language Teachers

研究代表者

東條 弘子 (TOJO, Hiroko)

宮崎大学・教育学部・准教授

研究者番号：00756405

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、大学英語教師の授業実践録における傾向と特徴を継続的に捉え、授業に関する省察のあり方を分析し検討することにより、現職教師の学習過程を明らかにすることである。

一人の大学英語教師による4ヵ月ならびに3年間の省察過程を比較した。結果、一般教養の英語授業では、教師が時間経過に伴い学生理解をより志向する傾向にあり、教職英語では教師が学生による学習内容の理解と専門知識の修得に、より注力することがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現職教師による授業に関する学習過程については、多くが明らかにされてこなかった。本研究では、授業後に執筆した実践録の記載内容を分析し検討することで、英語教師の認知変容過程を捉え、学習モデルを構築することを目的とした。

一般教養英語と教職英語課程で、双方における教師認知過程を継続的に比較した結果、異なる志向性を辿ることがわかった。複数の授業内容を指導する教師認知がさほど異なるならば、実際に各教師がどのような認知方略を採るのかを捉えることが望ましい。

研究成果の概要(英文)： This study explores the process of a university English language teacher's cognition through analysing the tendencies and features of her reflective writings after daily classes.

There are two main findings: (1) the teacher focuses on knowing about each student in compulsory English lessons and (2) she concerns more on how the students engage in professional knowledge in teacher training English lessons.

研究分野：英語教育学

キーワード：授業省察過程 授業実践録 教師認知 教師の学習過程 アクション・リサーチ 教職課程 認知変容過程 反省的实践家

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

現職教師は日々の授業実践を通し、児童・生徒・学生・同僚教師から影響を受け、教えることを学び長期的な成長を遂げる。教師の認知的な熟達化を捉える際には、主として新任教師と熟練教師間での認知を比較する手法が採られてきた。しかし新任期と熟練期における認知変容過程がブラックボックスと化し、中堅教師の認知のあり方や長期の継時的な認知変容過程は殆ど論じられてこなかった。また、大学内においては、教員志望者を対象とした学習過程が明らかにされる一方で、現職教師による学習過程については概ね未知である。よって現職教師が授業に関しどのように学ぶのかを示す、実証的で包括的な学習モデルの構築が求められている。

2. 研究の目的

大学英語教師の授業実践録における傾向と特徴を継時的に捉え、授業に関する省察のあり方を分析し検討することにより、現職教師の学習過程を明らかにすることが目的である。本研究は、大学英語教師の記す授業実践録を時系列で量的・質的に分析し、その傾向と特徴を捉える。現職教師の授業省察過程をふまえ、学習モデルを提示する本研究は、縦断的・実証的アクション・リサーチとして授業実践者と研究者双方に対する意義を持つ。

3. 研究の方法

主として2つに大別できる。一つは、半期授業実践録の内容を分析するものである。もう一つは、3年間の授業実践録の内容を分析するものである。双方いずれについても、量的分析と質的分析を行う。量的分析により、授業実践録の全体的な傾向を明らかにし、本研究の客観性・妥当性を担保する。質的分析により、授業者の声を照射する記述を調査対象とすることで、読者への転用可能性を保証する。上記の方法論的複眼により、記載内容を規定する社会的文脈を捉え、本研究の実証性を補完し強化する。

4. 研究成果

半期授業実践録における記載内容を分析した結果、4月当初に教師は「学生理解」を志向していた一方、7月になると「学生認知」を志向するようになることがわかった。時間経過に即して、教師は学生個人の認知をどのように伸ばすかについて熟慮するようになった。また、半期間では教師による正の「感情・感覚」が、負の「感情・感覚」より多く生起しており、多岐に渡っていた「感覚・感情」が徐々に絞られる傾向にあった。そして、教師認知の約3分の2は、協働的な対話の様相で占められていた。しかし半期の実践録を調査対象としていることから、より長期のデータを詳細に分析し検討することが求められる。加えて、教師が授業内容について継時的にどのように思考を深めるのか、学生認知の発達をどのように志向するのかについての、多角的な考察も必要である。

そこで、本研究では引き続き上記半期も含め3年間に亘る授業実践録の記載内容を対象とし、半期授業実践録の分析時に用いた尺度を踏襲し、縦断的な研究を行った。このことにより、教師認知のあり方についてさらなる詳細な視座を得ることとした。この研究では、一人の教師による二つの大学での一般教養英語と教職英語の授業実践録を分析し比較した。結果として、以下の4点が明らかになった：(1) 3年間を通した記載内容に、9つの命題が一貫して見られた；(2) 一般教養英語の授業では、指導学生に対する「愛情」表現が記載内容に含まれる一方で、教職英語の授業に関しては指導学生に対する「愛情」表現が示されず、教師は自己の感情を抑制し実践録を記す傾向にあった；(3) 教職英語の授業に関わる記載内容の48%が「教師認知」に区分され、「学生認知」と「授業手順」を加えると、全体の90%を占めた；(4) 「教師認知」に関わる記載内容が、時間を経るごとに複雑化し、後年には教授内容知識が頻出する傾向にあった。これら4点より、二つの大学で類似の教育課程が展開される中であっても教師の感情が一様ではないこと、ならびに各大学における学生の志向性が異なる故に教師による記載事項や指導のあり方に、少なからず影響を受ける可能性があることが示唆された。上記4点に関わる量的なデータ分析の結果を、以下に提示する。

(1) 全記載内容に見られる9つの命題

授業省察録における全ての記載内容は、上記①～⑨のいずれかの命題に属していた。

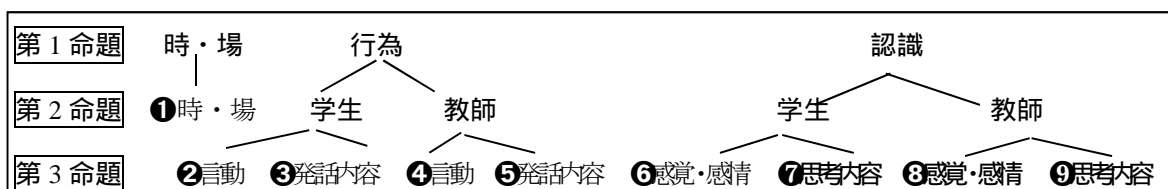


図1 分析カテゴリーとなる第1～3命題

(2) 学生に対する「愛情」表現の有無

上記「⑧教師の感覚・感情」の詳細な傾向と特徴を明らかにするために、さらに以下で示す20下位項目(良好・快適・同意・違和・推察・安心安堵・愛情愛慕・感謝敬意・感動感心・驚き歓喜・興味関心・期待希望・危惧懸念・自戒自責・悔恨後悔・罪悪謝罪・落胆諦め・甘え未完成・困難至難・不快不本意)に、記載内容を文節ごとに類型化していった。3年間の「教師の感覚・感情」の推移を、一般教養英語の授業と教職英語の授業とに分けて比較した結果、一般教養英語の授業では学生への「愛情」について言及がなされる一方で、教職英語の授業では一度もこのことについて言及がなされなかった。教職英語の授業では、卒業後に教師として即戦力となることが学生に求められ、教師が学生に対し専門知の修得に力を注ぎ、自己の感情を抑制してこのことに専心していると考えられる。

(3) 授業における「教師認知」の占有率

省察録の記載内容における主題を科目別に比較すると、一般教養英語と教職英語の双方

において「教師認知」についての占有率（48% と 35%）が最も高い。教職英語の授業に関するこの項目に次ぐのは、「授業手順（22%）」と「学生認知（20%）」であり、これら 3 項目で教職英語授業全体の 90%を占める。授業の流れや学生の認知の有り様をふまえ、教師が自らの実践的知識と専門性に基づき指導する過程に則った思考が、教職英語授業の省察時により頻出する傾向にある。なお、続く（4）では、教職英語授業における「教師認知」の有り様についてより詳細に論ずる。

（4）「教師認知」の複雑化と教授内容知識の反映

教職英語授業における「教師認知」の構成要素について明らかにするために、（1）で既述した①～⑨の命題を用いて、各文節を類型化した。結果、「④教師の言動（30%）」、「⑧教師の感覚・感情（22%）」、「⑤教師の発話や記載内容（20%）」、「⑨教師の思考内容（10%）」が上位 82% を占めた。一方、教職英語授業での「教師認知」における「学生」に関しては、「②学生の言動（12%）」、「⑥学生の感覚・感情（2%）」、「③学生の発話や記載内容（2%）」に分類され、これら 3 項目を合計しても「教師認知」全体の 16%に留まった。教職授業では、教師が授業について省察する際に、自身の行為や認知を再考する営為を通し、専門性の構築がより促され、省察過程の有り様が複雑化していった可能性がある。各期・各授業における記載内容を質的に分析した結果から、授業後に教師が思考した事象が実践的知識と理論上の概念に即して言及されていることもわかった。

以上 4 点の結果、ならびに半期の授業省察録の有り様をふまえ、本研究は以下の結論を導出した。4 ヶ月間の実践録を分析し検討した結果、教師が初期には「学生理解」を志向していたが、徐々に「学生認知」を志向するようになることがわかった。時間を経るごとに教師は、学生の認知をいかにして伸長させようか知恵を絞るようになる。さらに 3 年間の省察録を分析したところ、教職英語授業では「学生認知」以上に、「教師認知」のあり方について教師が授業後に省察している傾向が明らかになった。また、大学で英語教師は複数の授業科目を担うことから、「教師認知」の有り様に授業内容の差異が少なからず影響を及ぼす可能性が示唆された。3 年間の教師による授業省察過程の傾向と特徴として、一般教養英語の授業時に比べ教師は教職英語の授業を省察する際に、自身の実践的知識に基づくより複雑な思考を辿るのである。この営みにおいて、教師は充実感を覚える反面、難しさや葛藤も覚えており、教師認知のあり方が複雑で授業実践を含む社会的文脈に密接に関連していることも示唆された。実際、年間時間割において、一般教養英語と教職英語の授業が交互に設定されることも多いことから、教師の認知が各々別の事象に適宜その都度その都度、対応しているとはにわかに信じ難い。しかし例えば、自身の実践的知識と専門性がより教職英語授業において発揮される可能性があると思定すると、一般教養英語の授業に関する教師の認知活動の有り様を再考することで、より授業実践ならびに教師の学習過程自体がさらに洗練され豊かになる可能性もあろう。

本研究は、3 年間の大学英語教師による授業省察過程の変容を実証的に明らかにしている。一

方で、複数の課題も残されている。本研究では、教師の置かれている社会的文脈に即して、一人の教師が実際に行った異なる授業科目と内容をふまえ、教師認知のあり方について包括的に考察し結果を導出している。しかし教科内容の差異を考慮した上で、最初から各々の教科内容に即して省察録の内容記載を別途分析し検討することも可能である。したがって、今後はより多くの現職英語教師による授業実践録の有り様を詳細に捉えることが求められる。また、本研究では授業実践録の記載内容を分析し検討することを通して、教師認知の一端を照射するに至った。しかしながら、教師認知のあり方を考察するにあたっては、授業後だけでなく、授業の前、ならびに授業中も含め、さらに多角的に事象を捉え議論することが望ましい。授業中の教師認知を明らかにするには、例えば教室談話研究の視座に基づき、教師や学習者の発話の有り様に即して教師認知の様相を捉えることもできよう。今後はこれらの残された課題についても明らかにすることで、授業研究のさらなる充実と可能性を模索していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 東條弘子・高木亜希子	4. 巻 47
2. 論文標題 外国語教育質的研究における調査対象の抽出方法：サンプルサイズが1の場合に着目して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会誌	6. 最初と最後の頁 87-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 東條弘子	4. 巻 32
2. 論文標題 大学英語ライティング授業における協働的な対話の特徴：学習者間での互恵的な質問の分析と検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 関東甲信越英語教育学会誌	6. 最初と最後の頁 99-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 東條弘子	4. 巻 90
2. 論文標題 子どもたちから学んだこと：中学校英語授業におけるエピソードの記述	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 宮崎大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 33-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 東條弘子・アダチ徹子・別府百合亜・齋藤匡・坂口瑞穂・園田伊公子・山本延久	4. 巻 26
2. 論文標題 外国語活動及び授業での児童・生徒・教師による足場かけの特徴：小・中一貫校における教室談話分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 宮崎大学教育協働開発センター紀要	6. 最初と最後の頁 67-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 TOJO Hiroko	4. 巻 46
2. 論文標題 Scaffolding in University English Language Listening and Speaking Lessons: A Classroom Discourse Analysis on Group Work and Whole Class Discussions	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 九州英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 61-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 肥田木洋之・東條弘子	4. 巻 91
2. 論文標題 高等学校英語授業での教師によるリヴォイシングの機能	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 宮崎大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 137-148
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 東條弘子	4. 巻 32
2. 論文標題 大学英語ライティング授業における協働的な対話の特徴：学習者間での互恵的な質問の分析と検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 関東甲信越英語教育学会誌	6. 最初と最後の頁 99-113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 東條 弘子・アダチ徹子・坂口 瑞穂・園田伊公子・山本 延久・別府百合亜・齋藤 匡	4. 巻 26
2. 論文標題 外国語活動及び英語授業における足場かけの機能と特徴：小中一貫連携教育での教室談話分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 宮崎大学教育学部附属教育開発センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 67-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 東條弘子・高木亜希子	4. 巻 47
2. 論文標題 外国語教育質的研究における調査対象の抽出方法：サンプルサイズが1の場合に着目して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 87-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 東條弘子	4. 巻 90
2. 論文標題 子どもたちから学んだこと：中学校英語授業におけるエピソードの記述	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 宮崎大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 33-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 東條弘子
2. 発表標題 大学英語教師による授業省察過程の検討
3. 学会等名 全国英語教育学会第44回京都研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Akiko Takagi and Hiroko Tojo
2. 発表標題 How Purpose Statements and Research Questions Are Formed in Qualitative Second and Foreign Language Teaching and Learning Research: Implications from Current Research Articles
3. 学会等名 Educational Research Association of Singapore (ERAS) Asia-Pacific Educational Research Association (APERA) International Conference 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 東條 弘子・高木亜希子
2. 発表標題 外国語教育質的研究における調査対象の抽出方法：サンプルサイズが1の場合に着目して
3. 学会等名 中部地区英語教育学会第47回長野研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 東條弘子
2. 発表標題 大学英語ライティング授業での学習者間における対話の特徴
3. 学会等名 全国英語教育学会第43回島根研究大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 東條弘子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 336
3. 書名 中学校英語科における教室談話研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考